

第一 問

次の文章は、ある精神分析家が自身の仕事と落語とを比較して述べたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

いざ仕事をしているときの落語家と分析家に共通するのは、まず圧倒的な孤独である。落語家は金を払って「楽しませてもらう」とわざわざやってきた客に対して、たった一人で対峙^{たいじ}する。多くの出演者の出る寄席の場合はまだいいが、独演会になるとそれはきわだつ。他のパフォーミングアート、たとえば演劇であれば、うまくいかなくても、共演者や演出家や劇作家や舞台監督や装置や音響のせいにできるかもしれない。落語家には共演者もないし、みんな同じ古典の根多^{ねた}を話しているので作家のせいにもできず、演出家もない。すべて自分で引き受けるしかない。しかも落語の場合、反応はほとんどその場の笑いでキャッチできる。残酷なまでに結果が演者自身にはねかえってくる。受ける落語家と受けない落語家はつきりしている。その結果に孤独に向き合い続けて、ともかくも根多を話し切るしかない。

分析家も毎日自分を訪れる患者の期待にひとりで対するしかない。そこには誰^{だれ}もおらず、患者と分析家だけである。私のオフィスもそうだが、たいいてい受付も秘書もおらず、まったく二人きりである。そこで自分の人生の本質的な改善を目指して週何回も金を払って訪れる患者と向き合うのである。分析料金はあまり安くない。普通の医者が一日数十人相手にできるのに対して、七、八人しか会えないので、一人の患者からある程度いただかないわけにはいかないからだ^aが、たいいてい高いと思われる。真つ当な鯨屋^{すし}が最初高いように思えることと似ている。そういう料金を払っているわけであるから、患者たちは普通もしくは普通以上に力^a^b^c^d^e^f^g^hⁱ^j^k^l^mⁿ^o^p^q^r^s^t^u^v^w^x^y^z^{aa}^{ab}^{ac}^{ad}^{ae}^{af}^{ag}^{ah}^{ai}^{aj}^{ak}^{al}^{am}^{an}^{ao}^{ap}^{aq}^{ar}^{as}^{at}^{au}^{av}^{aw}^{ax}^{ay}^{az}^{ba}^{bb}^{bc}^{bd}^{be}^{bf}^{bg}^{bh}^{bi}^{bj}^{bk}^{bl}^{bm}^{bn}^{bo}^{bp}^{bq}^{br}^{bs}^{bt}^{bu}^{bv}^{bw}^{bx}^{by}^{bz}^{ca}^{cb}^{cc}^{cd}^{ce}^{cf}^{cg}^{ch}^{ci}^{cj}^{ck}^{cl}^{cm}^{cn}^{co}^{cp}^{cq}^{cr}^{cs}^{ct}^{cu}^{cv}^{cw}^{cx}^{cy}^{cz}^{da}^{db}^{dc}^{dd}^{de}^{df}^{dg}^{dh}^{di}^{dj}^{dk}^{dl}^{dm}^{dn}^{do}^{dp}^{dq}^{dr}^{ds}^{dt}^{du}^{dv}^{dw}^{dx}^{dy}^{dz}^{ea}^{eb}^{ec}^{ed}^{ee}^{ef}^{eg}^{eh}^{ei}^{ej}^{ek}^{el}^{em}^{en}^{eo}^{ep}^{eq}^{er}^{es}^{et}^{eu}^{ev}^{ew}^{ex}^{ey}^{ez}^{fa}^{fb}^{fc}^{fd}^{fe}^{ff}^{fg}^{fh}に力^aをこら^bす。そうしてなかで、分析家はひとりで患者と向き合うのである。何の成果ももたらさないセッションも少なくない。それでもそこに五十分座り続けるしかない。

多くの観衆の前でたくさんの期待の視線にさらされる落語家の孤独。たったひとりの患者の前でその人生を賭けた期待にさらされる分析家の孤独。どちらがたいへんかはわからない。いずれにせよ、彼らは自分をゆすぶるほど大きなものの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求されている。それに失敗することは、自分の人生が微妙に、しかし確実に^cオビヤかされることを意味する。客が来なくなる。患者が来なくなる。

おそらくこの^aところを凍らせるような孤独のなかで満足な仕事ができるためには、ある文化を内在化して、それに内側からしっかりと抱えられる必要がある。濃密な長期間の修業、パーソナルで^dジョウシヨ的なものを巻き込んだ修業の過程は、それに役立つているだろう。落語家も分析家も文化と伝統に抱かれて仕事をする。しかし、そうした内側の文化がそのままで通用することは、落語でも精神分析でもありえない。ただ、根多を覚えたとおりにやつても落語にはならないし、理論の教えるとおりに解釈をしても精神分析にはならない。観客と患者という他者を相手にしているからだ。

演劇などのパフォーマンスアートにはすべて、何かを演じようとする自分と見る観客を喜ばせようとする自分の分裂が存在する。それは「演じている自分」とそれを「見る自分」の分裂であり、世阿弥が「離見の見」として概念化したものである。落語、特に古典落語においては、習い覚えた根多の様式を踏まえて演^eりながら、たとえばこれから自分が発するくずぐりをいま目の前にいる観客の視点からみる作業を不断に繰り返す必要がある。昨日大いに観客を笑わせたくずぐりが今日受けるとは限らない。彼はいったん今日の観客になって、演じる自分を見る必要がある。完全に異質な自分と自分との対話が必要なのである。

しかも落語という話芸には、他のパフォーマンスアートにはない、さらに異なった次元の分裂の^eケイキがはらまれている。それは落語が直接話法の話芸であることによる。落語というものは講談のように話者の視点から語る語り物ではない。言ってみれば地の文がなく、基本的に会話だけで構成されている。端的に言って、落語はひとり芝居である。演者は根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する。根多に登場する人物たちは、おたがいにはげたり、つつこんだり、だましたり、ひっかけたりし合っている。そうしたことが成立するには、おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物たちがそこに現れなければならない。落語が生き生きと観客に体験されるためには、この他者性を演者が徹底的に維持することが必要である。^f落語家の自己はたがいに

他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する。私の見るところ、優れた落語家のパフォーマンスには、この他者性の維持による生きた対話の運動の心地よさが不可欠である。それはある種のリアリティを私たちに供給し、そのリアリティの手ごたえの背景でくすぐりやギャグがきまるのである。

おそらく落語という話芸のユニークさは、こうした分裂のあり方にある。もつと言えば、そうした分裂を楽しんで演じている落語家を見る楽しみが、落語というものを観る喜びの中核にあるのだと思う。そして、人間が本質的に分裂しているからこそ、精神分析の基本的想定である。意識と無意識でもいい、自我と超自我とエスでもいい、精神病部分と非精神病部分でもいい、本当の自己と偽りの自己でもいい、自己のなかに自律的に作動する複数の自己があつて、それらの対話と交流のなかにひとまとまりの「私」というある種の錯覚が生成される。それが精神分析の基本的な人間理解のひとつである。落語を観る観客はそうした自分自身の本来的な分裂を、生き生きとした形で外から眺めて楽しむことができるのである。分裂しながらも、ひとりの落語家として生きていく人間を見ることに、何か希望のようなものを体験するのである。

エ 精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている。分析家が患者の一部分になることを通じて患者を理解することを前に述べた。たとえば、このころのなかに激しく自分を迫害する誰かとそれにおびえてなすすべもない無力な自分という世界をもっている患者は、分析家に期待しながらも、迫害されることにおびえて、分析家を遠ざけ絶えず疑惑の目を向け拒絶的になる。分析家はやがてそのような患者を疎ましく感じ、苛立ち、ついに患者に微妙につらく当たるようになる。こうした過程を通して分析家はまさに患者のこのころのなかの迫害者になつてしまう。さらに別のことも起きる。分析家は何を言つても患者にはねかえされ、どうしようもないと感じ、なすすべもない無力感を味わう。それは患者のこのころのなかの無力な自己になつてしまったことである。こうして患者のこのころの世界が精神分析状況のなかに具体的に姿を現し、分析家は患者の自己の複数の部分に同時になつてしまい、その自己は分裂する。

もちろん、そうして自分でないものになつてしまうだけでは、精神分析の仕事はできない。分析家はいつかは、分析家自身の視点から事態を眺め、そうした患者の世界を理解することができなければならない。そうした理解の結果、分析家は何かを伝える。

そうして伝えられる患者理解の言葉、物語、すなわち解釈というものに患者は癒^いされる部分があるが、おそらくそれだけではない。分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができ^オる生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいるのだらう。自分はこのころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされていなくてもいいのかもしれない。ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれないのだ。

（藤山直樹『落語の国の精神分析』）

〔注〕 ○根多——「種」^たを逆さ読みにした語。

○くすぐり——本筋と直接関係なく挿入される諧謔^{かいぎやく}。

○自我と超自我とエス——フロイト(Sigmund Freud 一八五六～一九三九)によって精神分析に導入された、自己に関する概念。

設問

(一) 「このころを凍らせるような孤独」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「落語家の自己はたがい他者性を帯びた何人もの他者たちによつて占められ、分裂する」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「ひとまとまりの「私」というある種の錯覚」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

(五) 「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいる」(傍線部オ)とあるが、なぜそういえるのか、落語家との共通性にふれながら一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(六) 傍線 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a カセ(いで) b ナグサ(め) c オビヤ(かされる) d ジョウシヨ e ケイキ

[illegible]